

花橙

自
集
歌

911.168-Ki64-87

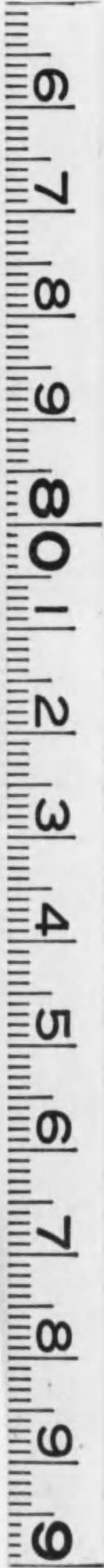
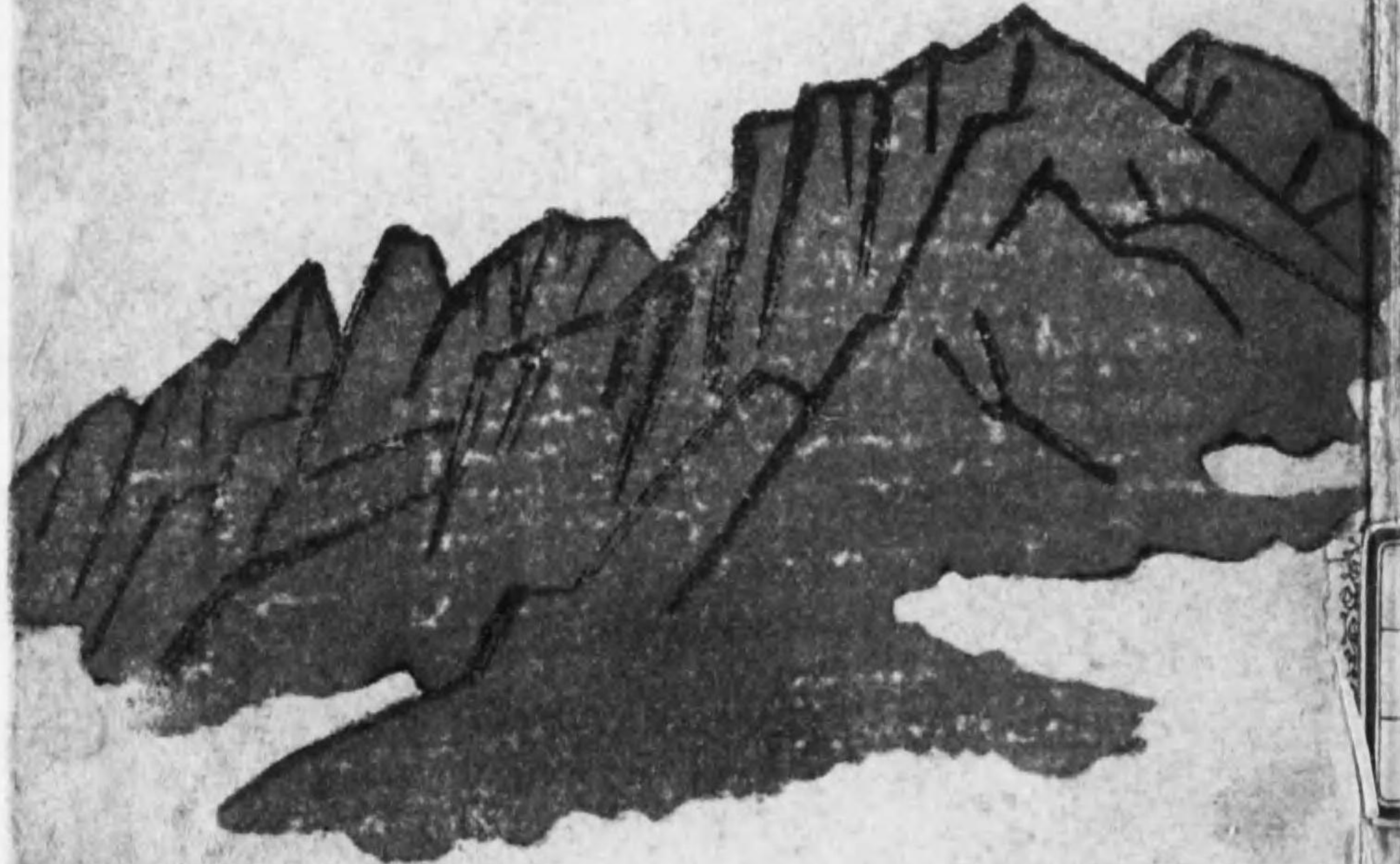


1200500755616

911.168

64

8



始





911.168
K264
8

北原白秋著
花櫨
改造社版



~~1013~~
~~364~~

花

檉

20119
20118
8

自錄
自錄

自錄
自錄

自錄
自錄



自錄



裝幀 石井鶴三

花 櫛 目 次

桐の花	(自明治四十二年 至大正元年)	一
雲母集	(自大正四年 至大正四年)	五二
輪廻三鈔	(自大正七年 至大正七年)	九三
雀の卵	(自大正七年 至大正七年)	一二三
葛飾閑吟集	(自大正十四年 至大正十四年)	一四二

— 錄百二十首 —
— 錄百二十首 —
— 錄四十三首 —
— 錄七十六首 —
— 錄百九首 —

『桐の花』より

銀笛哀慕調



春の鳥春な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草
に日入る夕べ

銀笛のごとも哀かなしく單調たんてうに過ぎもゆきにし夢
なりしかな

いやはてに鬱金うぶきんざくらのかなしみのちりそめ
ぬれば五月さつきはきたる

ヒヤシンス薄紫うすむらさきに咲きにけりはじめて心顫ふるひ
そめし日

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひ
この春のまなざし

南風なんふう薔薇ばらゆすれりあるかなく斑猫はんねこ飛びて死ぬ
る夕ぐれ

凋しおれゆく高さ花の香身に染しみつ貧ひんしき街の春
の夜の月

寝ねてきけば春夜しゅんやの音ねいろ泣なくごとしスレート
屋根やねに月の光ひかりれる

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬にや
ますめぐるも

夕暮のとりあつめたる靄のうちしづかにひと
の泣く音ねきこゆる

いつまでか春は木末にどごまらむ風吹きあつ
る青梨のはな

行く春の霞け遠くなりはにけりきのふは君が眼
も燃えにける

ゆく春の喇叭はの囃子は身にぞ染む造花つちる雨の
日の暮

美しき「夜」の横顔を見るごとく遠き街まち見て心
ひかれぬ

夏 郷里柳河に歸りてうたへる歌

廢れたる園に踏み入りたんぼの白きを踏め
ば春たけにける

枇杷の木に黄なる枇杷の實かがやくとわれ驚
きて飛びくつがへる

大き枇杷もぎておとせば吾弟らが麥藁帽にう
けてけるかな

馬鈴薯の花咲き穂麥あからみぬあひびきのこ
と岡をのぼれば

黒鶴野邊にさへづり唐辛子いまし花さく君は
いづこに

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこ
し畑の黄なる月の出

葉のそちてほのくれなるの合歡なむのはなにほへ
る見ればをさな夕合歡なむ

水のべにいまだをさなき合歡の花ほのけく紅あか
く君も眠ななむ

過ぎし日のをさな遊びの土の鳩吹きて鳴らさ
な月のあかりに

まだ明ある釣鐘草の夢ならむ夕とどろきの遠く
きこゆる

汗あゆる夏のゆふべはすがすがし葦の葉卷き
て吹くべかりけり

ふるさとの麥の刈穂かりほのい寝いねごこち幼な遊びの
聲もほめきぬ

都べへ立たむ日近し菱賣の向脛黒く秋づきに
けり

秋

日の光金絲雀のごとく顫ふとき硝子に凭れば
人のこひしき

多

蕪崎の白きペンキの驛標に薄日のしみて光る
さみしき 十一月北國の旅にて

日も暮れて櫛の實探りのかへるころ廓の裏を
ゆけばかなしき 久留米旅情の歌

初夏晚春

公園のひととき

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣か
まほしけれ

山羊の乳と山椒のしめりまじりたるそよ風吹
いて夏は来りぬ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝
て削るなり

横向きてほのかに黒き下まぶた若葉あかりに
君は疲れぬ

ああ五月螢匍ひいでヂキタリス小さき鈴ふる
和魂の泣く

郊外

きさくなる蜜蜂飼養者が赤帯の露西亞の地主
に似たる初夏

太葱の一莖ごとに蜻蛉ゐてなにか恐るるあか
き夕ぐれ

春の名残・一九一〇暮春三崎の海岸にて

いつしかに春の名残となりにけり昆布干場の
たんぼの花

野薊に觸れば指やや痛し汐見てあればすこし
眼いたし

鉋研ぐ濱の大工の指のさきししみ光れり漣に
向き

春の月ちさき時計の蠟面に光る夜なりさかぢ
め焼きゐし

ふはふはとたんぼぼの飛びあかあかと夕日の
光り人の歩める 二

「春」はまたとんぼがへりをする兒らの悲しき
頬のみ見つつかへるや

薄明の時

放埒

アーク燈點れるかげをあるかなし螢の飛ぶは
あはれなるかな

雪の下白く小さく咲きにけり喜蝶が部屋の箱
庭の山

木の枝に青き小鳥のとまりゐてただほれほれ
と鳴ける品川

薄暮

夕青き微光の中をあがりゆく足長蜂は足を垂
らせり

あかしや

あかしやの花咲く見れば水の上にはかなき夏
の夢もやどりぬ

踊子

惱ましく廻り梯子をくだりゆく春の夕べの踊
子がむれ

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳ぬる尻ふり
踊にしくものはなし

浅き浮名

戀すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつか
し白芥子の花

片戀のわれをあはれと鈴麥の花さく傍を通ひ
來にけり

わが世さびし身丈おなじき茴香も薄黄に花の
咲きそめにけり 二

茴香の花の中ゆき君の泣くかはたれどきのこ
こちこそすれ

さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの
空に桐の匂へる 三

ほのぼのと人をたづねてゆく朝はあかしやの
木にふる雨もがな 四

蟾蜍の時

螢飛び蟾蜍鳴くなりおづおづと忍び逢ふ夜の
薄霧の中

河豚

河豚よ河豚よ汝は愚かし地に跳ねて沖津玉藻
の香のなげきする

花櫻

櫻わかば月の光とけぶらへばいの寝ぬ鳥か身
じろぎつつも

花櫻の香に眠ぬ鳥よほのけくは或は鳴きては
たや止みにし

路上

春

いそいそと廣告燈も廻るなり春のみやこのあ
ひびきの時

水路

空見れば圓弧燈に雪のごと羽蟲たかれり春よ
いづこに

夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にし
ばしかがやけ

折ふしのものの流行のなつかしくかなしけれ
ばぞ夏もいぬめる

新しき勻なによりうらがなし勸工場のぞく五
月のこころ

人力車の提灯點けて客待つとならぶ河邊に螢
飛びいづ

雨のあとさき

新しき野菜畑のほととぎす背廣着て啼け雨の
霽れ間を 一

あまつさへキヤベツかがやく畑遠く郵便脚夫
疲れくる見ゆ

入日うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の
黄なるかがやき 二

人妻のしみみ汗ばみ乳をしぼる硝子杯のふち
のなつかしきかな 三

君憎む夏の心のものづかれ茴香の花に凭るも
あはれや 四

晝見えぬ星のころよなつかしく刈りし穂に
凭り人もねむりぬ 五

玉赤き蠟マツチする草のなかすでに螢の臭氣にほひ
ひせべり 六

晝の鈴虫

明治四十四年夏、鎌設町の岩佐病院にて

麻酔の時

朝顔を紅く小さしと見つるいのち消えむとぞ
する鳴け鳴け鈴虫

夕ぐれ

ほのかなる水くだもののにほひにもかなしや
心疲れむとする

立秋

長廊下いろ薄黄なる水薬の瓶ひとつ持ち秋は
來にけり

秋思

その一

松脂のほひのごとく新しくなげく心に秋は
きたりぬ

薄らかに紅く孱弱し風仙花人力車の輪にちる
はいそがし

下町はふらんねる織る手のさきのにほひ幽かに秋立ちにけり

白き猫晝もさびしか花あかき百日紅にのぼりるにけり

きのこ

食堂の黄なる硝子をさしのぞく山羊の眼のごと秋はなつかし

静かなる秋のけはひのつかれより櫻の霜葉ちりそめにけむ

香ににほふ秋の日向の静ごころ茴香草も實となりける

夕タ粘ネる羽ハ蟲ムシの線せんのあかあか光るしばしを秋もなづめり

菊の香に朝の日のさす飾り窓硝子のかげも花
に映れり

ひいやりと剃刀ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄
なる初秋

黒き猫しづかに歩みさりけり昇菊の絃切れ
したまゆら

常磐津の連弾の撥いちやうに白く光りて夜の
ふけにけり

その三

百舌啼けば紺の腹掛新しきわかき大工も涙な
がしぬ

いらいらと葱の畑をゆくときの心ぼそさや百
舌啼きしきる

その四

黄なる日に鋪さびし姿見鏡かたみてりかへし人あらなくに百舌啼なきしきる

いつのまに黄なる葉となりちりにけむ青さいかちの夏の日のゆめ

わが友の黒く光れる瞳ひとまより恐ろしきなし秋ふけわたる

春を待つ間

戯奴

ほこりかにごんぼがへりをしてのくるわかき道化に涙あらすな

冬のさきがけ

ふくらなる羽毛襟ほ卷まのにぼひを新しむ十一月の朝のあひびき

いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそ
げばふる寒みぞれかな

電柱でんちゅうの白き碍子がしに凍み細く雨はそそげり冬き
たるらし

雪

厨女くわにょの白き前掛まへかけしみじみと青葱の香の染しみて
雪ふる

君かへす朝の鋪石しきいしさくさくと雪よ林檎の香の
ごとくふれ

屋根の雪暮れてひかれば三味線の棹しんをきゆう
きゆうと拭ぬぐく女なり

寂しさにきのふのぼりし観覧車今朝は廻まわらす
雪ゆきぶりの中

その翌朝おしろいやけの素顔吹く水仙の芽の
青きそよかせ

みじめなるエレン夫人が職業のミシンの針に
しみる雨かな

沈丁の薄らあかりにたよりなく齒の痛むこそ
かなしかりけれ

細葱の春の光はいたいたし眞晝しみにらに小犬
交れる

ふくれたるあかき手をあて婢女が泣ける厨に
春は光れり

春よ春よひとり野に出て戯けゆく小さき老女
にしばしかがやけ

野に來ればおたまじやくしの尾は黒くすでに
水面みづのの春ははすめり

りよりりようどひとすぢの水ふき出でたり冬
の日比谷の鶴のくちばし(冬一首)

白き露臺

春愁

歎けとていまはた目白僧園の夕べの鐘も鳴り
いでにけむ

春はもや静ころなし愁はしきよき人妻のか
ほばせのごと

温かに洋傘の尖もてうち散らす毛蓑こそ春は
かなしき

しみじみと二人泣くべく椅子の上の青き蜥蜴
をはねのけにけり

定齋の軋みせはしく橋わたる江戸の横網鶯の
啼く

鐸鳴らす路加病院の遅ざくら春もいましかを
はりなるらむ

夕かけて白き小鳥のものおもひ木にとまるこ
そさびしかりけれ

夜を待つ人

やはらかに赤き毛糸をたぐるとき夕とどろき
の遠くきこゆる

事もなくけふのひと日はてにけり赤きラン
プをまた點すなり

編みさしの赤き毛糸に刺す針の鉤針長しこほ
ろぎの鳴く

松の葉の松の木の間をちりきたるそのごほ
そきかなしみの來る

女友だち

ごくだみの花のにほひを思ふとき青みて迫る
君がまなざし

『雲母集』より

力
くわうくわうと光りて動く山ひとつ押し傾かたむけ
て来る力はも

鱧

鱧なまぢは大地の上は歩かねばただにごろりところが
がされにけり

大鴉

大鴉一羽渚なづさに黙もくふかしうしろにうごくさざな
みの列

寂光じやくくわうの濱に群れるる大鴉その眞上よりまた一羽來し

一羽飛び二羽飛び三羽飛び四羽五羽飛び大鴉の群むら飛びにけるかも

卵

大きな手があらはれて晝深し上から卵をつかみけるかも

かなしきは春晝の上にくろがれる七面鳥の卵なりけり

新生

水あさぎ空ひろびろし吾が父よここは牢獄ひとやにあらざりにけり

不盡

不盡の山れいろうとしてひさかたの天の一方に立てりけるかも

魚かつぎ丘にのぼれば馬鈴薯の紫の花いま盛りなり

ある時は

ある時はおのが家内の晝寝どき盗人のごと足音ひめにけり

ある時は誰知るまいと思ひのほか人が山から

此方向いてゐる

生きの身

麩麩を買ひ紅薔薇の花もらひたり爽かなるか
も両手に持てば

海雀

海雀つらつらあたまそろへたり光り消えたり
漣見れば

蕁菜

戀しけど今は思はず蕁菜の銀の水泥を掌に掬
ひ居つ

人なればわれもまことに憔悴す
蕁菜光れこの沼深く

明るさや寥しさを人も来す裸になれど泣くす
べ知らずも

寂しけれどおのれ輝き頭かぶす膝までも深く
泥に踏み入りて

照りかへる薄苺萱さみどりのひろびろし野に
今は出でつも

眼鏡橋

水の輪の耀きの揺れ緑ふかしひとり野菜をか
がみて洗へり

海外の濱

ふかぶかど人間笑ふ聲すなり谷一面の白百合
の花

ひとり来て涙落ちけりかきつばたみながら萎しほ
み夏ふかみかも

遊ヶ崎遊泳

ちちのみの父を裸になしまるらせ泳ぎにとゆ
くその子が二人ふたり

狐のかみそり

しんしんど寂しき心起りたり山にゆかめとわ
れ山に來ぬ

狐のかみそりかたまりて赤し然れどもひとつ
びとつ見れば風吹けりけり

海光

海にゆかばこの寂しさも忘れむ海にゆかめ
とうちいでて來ぬ

榜こぎいでてあはれはるばる來しものか沖に立
つ波かぎり知られず

われと櫓をわれと禮拜らいはいむ心なりひとすぢに水脈みづを光らしてゆけば

大きな人あらはれて目の前に不意に舟漕ぐ
うれしさうれしさ

水垂

水垂みづたの松のかげゆくあはれなり麗らなる日の
べら釣り小舟せうぶね

水垂の岩のはさまに垂る水のせうせうとして
晝なりけり

地面と野菜

大きな足が地面ちへんを踏みつけゆく力あふるる
人間の足が

畑に出でて見ればキャベツの球たまの列れつ白猫のこ
と輝きて居る

地面踏めば蕪みどりの葉をみだすいつくしき
かもわが足の上

摩訶不思議思ひもかけぬわが知らぬ大きなる
キヤベツがわが前に居る

ふと見つけて驚きにけりさ緑の野菜のかげの
大きな片足

はちら雑魚しづく投網を蕪畑蕪葉の上に早や
かい手操る

蕪の葉に濡れし投網をかいたぐり飛び翻る河
豚を抑へたりけり

丘の立秋

片岡に粟と豆とが赤ちやけて深くささやく熟
れにけらしも

泥豚

豚小屋に呻きころがる豚のかすいつくしきか
もみな生けりけり

豚小屋の上の棕櫚の木の裂葉より日は八方に
かがやきにけれ

晝休憩

銀いろの蕪かぶとの中に坐りたる面黒おもぐらの眼のみ大さ
な娘

積藁かぶとのかげむくむくと湧きあがるパイプの煙
見つつ眞紅まっかな日にあたり居り

小さき青木

青木に犬の尿いぼりのしたたれりけり美しきかな小
さき青木に

目の前にしんじつかかる一本いっぽんの青木立てりど
知らざりしかな

黍畑

三日の月ほそくきらめくきびはたけ黍畑黍は黍とし目の
醒めてゐつ

ほのかなる人の言葉に觸りたれば驚くものか
黍は夜ふけて

小夜ふけてほかに人こそ音すなれいづこの關
を行けるなるらむ

さらさら袖にさやらふ夜の聲を唐黍の葉か
と思ひつつとほる

關夜

願ひ湧く心しきりに我にあり海の夜ふけの關
のそよかせ

二本の棕櫚

天の川、棕櫚と棕櫚との間より幽かに白し關よけ
にけらしも

耳澄ませば闇の夜ヤ天てんをしろしめす圖はかり知られぬものの聲すも

棕栝二本ここの夜天の吾が聲は幽かなれども偽れなくに

何物の澄みて流るる知らねどもここの夜ヤ天てんの繁しげき光はも

水邊の午後

鬱蒼こんもりと楊柳ヤナギかがやくまさびしき遠き入江に日の移るなり

漣なみさざなみ何が憂しとて鈍銀にんぎんに暗くかけりてまた照るものか

千鳥ゐるされどあかるきさざなみの銀ぎん無垢むくわ光くわうに眼も向けられず

橋をわたりつくづくおもふこれぞこのいづこ
より來し水のながれか

照りかへる銀のさざなみ河やなぎ白き月さへ
その上に見ゆ

水の邊に時にひろがる網の目はこれ寂寥の眼
なりけり

この岬行き盡すまでいそがむと思ひきはめて
吾がたどるなり

二町谷小景

網の目に閻浮檀金の佛るて光りかがやく秋の
夕ぐれ

兩の掌に輝りてこぼるる魚のかす掬へども掬
へどもまた輝りこぼるる

落つ日の照りきはまれば何がなし小鳥岬をい
ま放れたり

海の波光り重なり日もすがら光り重なりまた
暮れにけり

山中秋景

木々の上を光り消えゆく鳥のかす遠空の中に
あつまるあはれ

山峽に橋を架けむと耀くは行基菩薩か金色光
に

谷底に人間のごと戀しきは彼金柑の光るなり
けり

帆をかけて心ぼそげにゆく舟の一路かなしも
麗かなれば

松並木なかに一點さびしきは金の茶店の甘酒
の釜

二方に晴れてかがやく秋の海みぎりひだりに
白帆ゆく見ゆ

金の星このもかのももの岨をゆく彼らは枯草負
ひたる童

引橋の茶屋のほとりをいそぐときはとほと秋
は過ぎぬと思ひさ

庭前小景

春過ぎて夏來るらし白妙のところてんぐさ採
る人の見ゆ

ふくふくと蒲團の綿は干されたり傍に鋭き赤
たうがらし

今朝あげし鰻の籠はまだ濡れて紅ふかき松葉
菊の花

海光

寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚逃げて
ゆく眞晝の光

海底の海鼠のそばに海膽をり日の照りとほり
影のしたしき

しんしんと夕さりくれば城ヶ島の魚籠押し流
し汐満ちきたる

磯

波つづき銀のさざなみはてしなくかがやく海
を日もすがら見る

網高く干せるその上の漣のかざり知られねさ
ざなみの列

麗かや此方へ此方へかがやき來る沖のさざな
みかざり知られず

この風の海の平のさざなみは足跡つけて吾が
歩むべし

漣のかがやきの間よししくしくに瞬き若くまた
光るなり

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかなる舟
の通るなるらむ

漁村晩秋

かくのごとき秋の簡素をわれ愛す枯木一本か
すかに光る

一心に遊ぶ子供の聲すなり明きとまやの秋の
夕ぐれ

油壺晩景

油壺から諸磯見ればまんまるな赤い夕日がい
ま落つるところ

赤々と夕日廻れば一またぎ向うの小山を人跨
ぐ見ゆ

種蒔

巡禮と野の種蒔人と春早し金色の陽に物言へ
りはり

夕ぐれの金色光の照るところ種蒔人三人背を
かがめたり

巡禮

照りかへる金柑の木がただひと木庭にいつば
いに日をこぼし居り

はるばると金柑の木にたどりつき巡禮草鞋を
はきかへにけり

遠樹抄

西方に金の遠樹のただふたつ深くかがやく何
といふ木ぞ

かうかうと金の射光の二方に射す野つ原に木
がふたつ見ゆ

閻魔の反射

芽の麥の島といはず崖といはず落日いつばい
に滴る赤さ

芽の麥の青き綺目の縦横に赤々し冬の日は染
みるなり

赤き日に黒き刺葉の沁み揺るる柀の根を人う
ちかへす

畑打てば閻魔大王光るなり枯木二三本に鴉ち
らばり

鍛下ろせばうしろ向かるる冬の畑そこに眞赤
な閻魔の反射

馬頭觀世音の前を通れば甘薯畑盲人こち向け
日が眞赤ぞよ

盲人よ盲人一心に何か聴きすましあかあかし
顔を日に向けてゐる

木がらし

はろばろに枯木わくれば甘薯畑おつ魂げるや
うな日が落ちてゐる

隣の厨

寂しさに秋成が書読みさして庭に出でたり白
菊の花

櫓をかつぎ漁人竈の前をゆくその櫓たちまち
火に照る赤く

圓^{つよ}ら眼^めの童子かまどの前に居りあなひもじさ
よ焰^{なま}の躍^なり

渚の西日

赤き日に彼ら無心に遊べども寂しかりけり童^{わらへ}
があたま

童子抄

何事の物のあはれを感すらむ大海^{だいかい}の前に泣く
童あり

ものなべて麗らならぬはなきものをなにか童
の涙こぼせる

朱のまろき大きき日輪海にありいまだいつくし
童^{わらへ}があたま

麗らなれば童^{わらへ}は泣くなりただ泣くなり大海の
前に聲も惜します

雪夜

この庵にまこと佛の坐すかと思ふけはひに雪
ふりいでぬ

冬青の葉に雪のふりつむ聲すなりあはれなる
かも冬青の青き葉

澄み入りてわが身ひとつにふる雪のはては音
こそなかりけるかも

めづらかに人のものいふ聲ぞする思ふに空も
明けたるならむ

見桃寺の鶏長鳴けりはろばろとそれにこたふ
るはいづこの鶏ぞ

雪後

あかつきの雪に群れつつゆらめくは木々に囀
る雀があたま

木の枝に雀つと一列いちれつならびゐてひとつびとつにも
の言へりあはれ

三崎遺抄

相模のや三浦三崎は燕の繪を湯屋ゆやの廂ひましに畫け
るところ

相模のや三浦三崎は屁の神を赤き旗立て祭れ
るところ

『輪廻三鈔』より

輪廻三鈔

序

大正三年六月、我未だ絶海の離輪小笠原にあり。妻は疊に一人家に歸り、すでに父母とよろしからず。七月我更に父母の許に歸り、またわが妻とよろしからず。我は貧し、貧しけれども、我をしてかく貧しからしめしは誰ぞ。而も世を棄て名を棄て、更に三界を流浪せしめしは誰ぞ。我もとより貧しけれど天命を知る。我が性玉の如し。我はこれ畢竟詩歌三昧の徒、清貧もとより足る。我は醒め、妻は未だ痴情の戀

に狂ふ。我は心より畏れ、妻は心より淫る。我父母の爲に泣き、妻はわが父母を譏る。行道念々、我高きにのぼらむとすれども妻は蒼穹の遙かなるを知らず。我深く涙垂るれども妻は地上の悲しみを知らず。我は久遠の眞理をたづね、妻は現世の虚榮に奔る。我深く妻を憫めども妻の爲に道を棄て、親を棄て、己を棄つる能はず。眞實二途なし。乃ち心を決して相別る。その前後の歌。

風懷

風高き椰子の葉末の月夜雲消なば消ぬべし歸
るすべなし

我やひとり離れ小島の椰子の木月夜の葉す
れ夜もすがら聴く

護謨の葉

護謨の木の畑の苗木の重き葉の大きな葉の
ふとひびらぎぬ

肉厚く重き護謨の葉照り久しおのづからふか
き音たてにける

嶋の日永

日は暑し夏の野椰子の葉すれより木高きもの
はあらしとぞ思ふ

ちちのみの父の嶋より見わたせば母の嶋見ゆ
乳房山見ゆ

蒼空に向つて

蒼空を見て驚かぬ賢しびと見ておどろけやい
にしへのごと

ひさかたの四方の天雲地に垂りて碧々しかも
蓋のごと

幼子を見よ彼等あそぶと蒼空の大圓蓋を我が
ものこせり

遙はろばろし空を仰げばますらをのこぼるる涙と
どめかねつも

わが行ゆきはのどにはあらずよ白鷺うけの浮足うし吾妹わがく
るしくば去れ

歎く妻に

天地あめを泣なきくつがへし晝も夜も泣なきひたすど
も我は貧しき

青山を枯山かきになして泣なきいざちて泣なきおらぶ
ども我は貧しき

この父この母この妻

老いらくの父を思へばおのづから頭かぶふかく垂
れ安き空しなし

ははそはの母に向へばおのづから涙はふり落
ち答ふすべしなし

うち背^せひ妻を憎めば火と燃えて笑みひたせま
る大き眼^めおもほゆ

ますらをと思へる我や貧しくて命はかけし妻
に嗤^{わら}はる

別
れ

うつし世のちよろづごとの誓^{ちか}言^ごもむなしかり
けりわかれ去らしむ

わが妻が別れに置きし一^{ひと}言^ごは眞^ま實^{じつ}なりけりよ
く聴きにけり

これの世に家はなしとふ女^{をんな}子を突き放ちたり
また見ざる外^とに

ほどほどに戸を去りあへず泣きにけり早や去
りにけり日の暮れにけり

貧しさに妻を歸して朝顔の垣根結び居り竹と
繩もて

別後

この我や心いたらぬ女子をあはれとは思へ憎
みあへなくに

我を擧げて人をあはれと思ふ日のいつかは來
らむ遙かなりけり

蟹味噌

蟹を搗き蕃椒搗り筑紫びと酒のさかなに噛む
夏は來ぬ

この我や響するごき蟹味噌の辛子噛ますば慰
ますけり

子供の野球

球を打つ音のよろしさ聞くさへや心は晴るる
悔しき時も

球投ぐる振のよろしさ見るさへや心はをどる
苦しき時も

眞向より飛び来る球待ち構ふる張りきらむす
る立ちの雄々しさ

童こそはひたむきなれ火のごとく飛び来る球
をかんとうち放す

童こそはひたむきなれ火のごとく飛び来る球
を身をそらし取る

童こそはひたむきなれ傍目ふらす飛び逸れ球
をひた走り追ふ

満月と鴉

眺むれば満月光に飛ぶ鴉一羽二羽三羽四羽五
羽六羽

鴉飛びて朱の満月過ぎるとき鮮かに見えつ太
き嘴くちばし

良夜

圓かなる月の光のいはれなくふと暗がりて來
る夜ふけあり

月の夜の白き天霧もくもくとながれて盡さず
夜灯の上

發電機

眞夏日の光はげしく聞けにけり耳に入り來る
發電機の音

ああ發電機おほどかなれどおのづから澄みて
妙なる聲放つなり

發電機の音聽けばこもごも忘れぬそのかの
聲もこもらひにけり

雨ふれば

雨ふれば青き御空ぞなつかしきその青空も寂
しと思へど

麗日

摩耶の乳長閑にふふますいとけなき佛の息も
ききぬべき日か

澄みわたる光のなかをゆく鴉かあゝと一聲啼き
にけるかも

麗らかに頭まろめて鳥の聲きいてゐるといふ
心になりけるかも

『雀の卵』より

竹と山水

おのづから水のながれの寒竹の下ゆくときは
聲立つるなり

ひと色に黒くにじめる冬の山雨過ぎぬらし竹
のみな靡く(墨畫を見て)

そぼ濡れて竹に雀がとまりたり二羽になりた
りまた一羽来て

いそがしく濡羽つくろふ雀ゐて夕かげり早し
四五本の竹

雀の藪

深藪に人家の燈あかあかど入りとどかねば啼
かぬ雀か

蛇窪村

しみじみとつめたき朝はとく起きてこちごち
の畑に人は火を焚けり

閻魔の咳

冬の光しんかんたるに眞竹原閻魔大王の咳と
ほる

澄みとほる青の眞竹に尾の觸れて一聲啼くか
藪原雉子

山内の時雨

三縁山増上寺の朱の山門にふる時雨日かな日
ぐらしふりにけるかも

松が枝ともみぢの枝にふる時雨松には松雀も
みぢには鴨

厨邊の霜

今朝見れば置く霜濃くて厨邊のごみための影
も紫に見ゆ

霜かぶる蕪がそばに目つむるは深むらさきの
首長の鴨

麻布十番

この夜ごとに星きららかに麻布の臺霜下り來
らし聲霧らふなり

常青き堅木常盤木その葉落ちすいよいよ經れ
ば霜下りにけり

寒天に吹きさらさるるいちるの木いちるひび
けりふかき夜霜に

この夜ごろ物の音牙えぬ巷邊の濃霜の凝りか
置き深むらし

雪 夜

大王の行幸かあらし旗立てて雪の御門を騎馬
出づる見ゆ

白 牛

瓦斯の燈に吹雪かがやくひとところ夜目には
見えて街遙かなる

吹雪やみて月夜明りとなりにけりおほに湧き
起る牛の遠吼

笹の雪

雪けぶり立てて幽かに飛ぶ雀笹の葉の間に羽
たたけり見ゆ

雪 曉

目のさめてややにふえゆく雀の聲あなあはれ
我も目はさめてゐる

人間のこゑ湧きおこるしのめどきすなはち
來る新聞くばり

淺草の雪

金龍山淺草寺の朱き山門の雪まつしろに霽れ
にけるかも

路次の朝

硝子戸をさやに拭きこむこの朝明隣の雪が目
の傍に見ゆ

雀飛ぶ屋根の遠見の雪煙かすかに射すは朝日
のかげか

屋根の雪霞みて暗き遠方はやや煙らへり風か
吹きいでし

雪煙ちらし蹴合へる組み雀ばばと立ちたり庇
まで来て

ほのかなる降りなりしかど椎の葉に一夜積み
たる雪のうれしさ

夜明の鶴

かうがうし鶴はこの世のものならず幽かに啼
けば生きたるらしも

嘴はそき鶴の一羽は見上げたり雪の氣霧らふ
空の暗みを

春泥の上に求食れど腰ほそく清らなるかな鶴
の姿は

鶴といへどひもじくあらし松が根の凍れる苔
に嘴つけにけり

茶の煙

茶の煙幽かなれかし幽かなる煙なれども目に
染みるもの

山家抄

雪ふれば御嶽精進もえは行かぬ凄じき冬に今はなりにけり

寂しさに堪へて眺むる白雪のほのぼのとして山家なりけり

奥山の山の狭間にふる雪のほのぼのつもり夜明けぬるかも

寂心

寂しさに堪へてあらめと水かけて紅き生薑の根をそろへけり

春のめざめ

おのづから睡眠さめ來るたまゆらはまだほのぼのし童ごころ

朝目ざめ朱墨つきたる掌などししみじみと見つ起きむともせず

鈴 蘭

本草のさびしき相のその中にことに寂しきは
深山鈴蘭

現世の身の成果もおもほえて寂しそぞおもふ
深山鈴蘭

沙羅の木 鷗外先生の庭

さすたけの君が御庭の沙羅の花夕かたまけて
見ればかなしも

人みなが

人みながわれをよろしといふ時はさすがうれ
しゑ心をとりて

人みながわれをわろしといふ時はさすがさぶ
しゑ心ぼそくて

米の飯

現身の人の日ごとに取り馴れて食ぶる飯を我
も食ぶる

日に常に食たべなれつつ米の飯やうましとも思おもはね我わがも飽あかぬかも

とり立てて味は香かはなし米の飯ただ嚙かみしめていよよ知るべし

うき世

青空の山のかなたに人住みてあぐる煙の世にもかそけさ

石版職工

人皆の眼まなこおどろき見てを居り人のひとりひとの描えく花蓮はなはすき

あかあかと蓮華はすき描かくとして描かきゐたり我も蓮華と見てゐたりけり

父と母

あなかそか父と母とは目のさめて何か宣のたまらせり雪の夜明あけを

あなかそか父と母とは朝の雪ながめてぞおは
す茶をわかしつ

あなしづか父と母とは一言のかそけきことも
晝は宣らさね

ちちのみの父のひとつの楽しみは夜に母刀白
と書讀ますこと

母刀自が父のみことの讀ます書あなおもしろ
と聞かす楽しさ

あなかそか父と母とのふたはしら早や寝ねま
しぬ宵の寒きに

母父の生みの御親のふたはしら寂しからせと
子は祈らぬを

父母とその子

父母の寂しき闇の御目さめは茶をたぎらせて
待つべかりけり

さざめ雪窓にながめて母父と浮世がたりをす
るが寂しさ

父母と摘みてそろへし棕櫚の葉に霰たまれり
米の粒ほど

父母と今朝もたばしる白玉の霰のさやぎ見る
が幽けさ

老いし父母

老いらくの父に向へば嚴かしき昔の猛さ今は
まさなくに

ははそばのこれや我が母我がどちのこのよき
母も老いましにけり

食しき食膳

しみじみと眼を見合せて親と子が貧しかりけり
飯をひろへる

葱のぬた食しつつぶとしこの葱は硬き葱ぞと
父の宣らしつ

母の深き吐息きくとき子の我や母のこころに
ひたと觸りたり

「童と母」反歌

急に涙が流れ落ちたり母上に裾からそつと蒲
團をたたかれ

春日遊樂

鞠もちて遊ぶ子供を鞠もたぬ子供見惚るる山
さくら花

うつり香

ははそばの母のころもは母の香ぞするちちの
みの父のころもは父の香ぞする

・ 柳河の玩具

雉子ぐるま雉子は啼かねど日もすがら父母戀
し雉子の尾ぐるま

竹屋の木蓮

竹河岸の竹の櫓やぐらの春寒し細かに見ればその尖さき
の揺れて

ひしひしと繁しむみ立てたれ竹の尖さきは突きぬけて
寒し並倉の上に

白木蓮花

白木蓮の花の木の間に飛ぶ雀遠くは行かね聲
の寂しさ

薄ぐもの春のけはひのつれなくてきのふけふ
白き街の木蓮

白木蓮の花のあなたの汐曇むらさきふかし今
日も去ぬらむ

白木蓮の花の木かげのたまり水いつしか青さ
苔の生ひにけり

『葛飾閑吟集』より

葛飾前歌

薄野

薄野に白くかほそく立つ煙あはれなれども消
すよしもなし

雀

朝ぼらけあさぼらけ一天いちてん晴れて黍の葉に雀羽たたくその
こゑさこゆ

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見
居りその揺るる枝を

眞間に移る

葛飾の眞間の繼橋夏近し二人わたれりその繼
橋を

葛飾の眞間の手見奈が跡どころその水の邊の
うさぐさの花

住みつかぬ山の庵はけうとけどまだそぞろな
り一日二日は

堪へがてぬ寂しさならず二人来て住めばすが
しき夏立ちにけり

この夏や眞間の繼橋朝なさなゆきかへりきく
あをがへる
のこゑ

おのづから心安まるすべもがと寂しき妻と野
に出でて見ぬ

鳩鳥の葛飾小野の夕霞ねもごろあかし春もい
ぬらむ

面ほそり寂し吾妹も浅茅生の露けき朝は裾か
かげけり

草の葉に生れしばかりの露の泡螢はいまだ光
りえなくに

かろがろと雀飛びつき小枝の揺り揺りもやま
ねば下覗き居る

香ばしく寂しき夏やせかせかと早や山里は麥
扱きの音

紫蘭咲く

紫蘭咲いていささか紅き石の隈目に見えて涼
し夏さりにつけり

うしろ向き雀紫蘭の蔭に居りややに射し入る
朝日の光

月夜

躑躅さきしろき月夜をさぬつ鳥雉子とよめり
こもらふらしも

山かげの眞間の庵の白つつじにほへる妹と夜
を樂しめり

雨の町

木の芽だつ楮ゆりつつ鳴く聲はまだいはけな
き夏の百舌かも

物の葉の葉べりにむすぶ雨だりは見つつよろ
しも揺れまろみつつ

蟹と竹

ささ蟹の音かき立つる竹の縁見のすがすがし
晝寝さめるる

見のすがし雨の霧らひやひた揺れにしぶく小
竹より蟹ころび落つ

晴日小閑

矢のごとく時たま翔る小鳥のかげ山すそに見
えて晴天の風

一天晴れて今朝し吹きまくつむじ風に吹きち
ぎられて飛ぶ木の葉青し

この山はたださうさうと音すなり松に松の風
椎に椎の風

松風の下吹く椎のこもり風なほしさやげり雨
はらら過ぎ

雑木の風ややしづもり松の風いやさや澄み
ぬ真間の弘法寺

器の花

我が庵の厠の裏のなつめの木花のさかりも今
は過ぎたり

紫煙草會

噴井べのあやめのそばの竹棚に洗面器しろし
妻か伏せたる

噴井べのあやめの下のこぼれ水雀飲み居りあ
ふるる水を

江戸川べり

夏浅み朝草刈りの童らが素足にからむ犬胡麻
の花

浅夜

月明き浅夜の野良の家いくつ洋燈つけたり馬
鈴薯の花

地靄立つ堆肥の前の百合の花月の光に照らさ
れにけり

月夜よし厩うまやの空の枇杷の木に啼く鶉うらゐて露し
とどなる

合歌

夕野良の小藪が下の合歌の花きり雨かかかる
雛燕ひなつばのこゑ

螢

河土手に螢の臭におひすすろなれど朝間はさびし
月見草の花

月の夜の堆肥たいひの靄かげに飛ぶ螢ほつほと見えて
近き瀬の音

晝ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて
消えたり

羽根そよがせ雀樗かまの枝に居り涼しくやあらむ
その花かげは

菅すがた壘今朝さやさやし風に吹かれ跳とび跳とび輕かき
青蛙かろがへ一つ

日ざかり

日の盛り細くするどき萱あやの秀ひに蜻蛉とんぼとまらむ
として翅はねかがやかす

ややに避よけて蜻蛉とんぼ日かげにとまりたりそよぎ
かがやく青萱あやのもと

牛

何の花にほふ草くさ生まぞ角さし入れうつつなく牛
の勢いきほひ嗅かげは

群蝶の舞

雪のごと湧きて翅はねばたくまつ白の蝶た下したには暗
きさざなみの列

揚羽の蝶

すれすれに夕紫陽花ゆふあざむぎに来て觸る黒き揚羽蝶あげはの
髭大いなる

唐 黍

ながれ来て宙にとどまる赤蜻蛉あかかげ唐黍の花の咲
き揃ふうへを

唐黍の紅き垂毛たれげのふさふさと揺れて下ゆく人
待つらむか

今日もまた郵便くばり疲れ来て唐黍の毛に手
を觸るらむか

そよかせに子供が遊んでゐる玉蜀黍とうもろこしはそばに
眞紅まっかな毛を揺りてゐる

百日紅

百日紅の花のさかりとなりなりにけり眺めてを居
らな寂しがりつつ

百日紅の花も咲きたり時をりは遊びに來ませ
やや遠くとも

貧しさ

貧しさに堪へてさびしく早稻の穂の花ながめ
をりこのあかつきに

群

早や秋早稻の穂づらを飛ぶ禽の一羽二羽輕し
涼風の遠

蓮の花さくころ

足の泥すすぎるにけり蓮の花はすす風の早稻
の穂にあづけつつ

鳩鳥の葛飾野良の蓮の雨笠かたぶけて來るは
誰が子ぞ

木槿と雀

はらはらと雀飛び來る木槿垣ふと見ればすす
し白き花二つ

はらら来て雀逸れゆく木槿垣風か立ちたる花
のうごくは

月夜こほろぎ

大荒れのあとにしみじみ啼きいづるこほろぎ
のこゑのあはれさやけさ

父の背に石鹼つけつつ母のこと吾が訊いてる
る月夜こほろぎ

良夜

月今宵背戸の畑の秋蕎麥に夜露ふりこぼれ晝
のごと明し

稗草

破障子ひたせる池も秋づけば目に見えて涼し
稗草のかげ

おのづからうらさびしくぞなりにける稗草の
穂のそよぐを見れば

二百二十日

ほつほつと雀出て来る残り風二百二十日の夕
空晴れて

庭前の秋

新らしく障子張りつつ茶の花もやがて咲かな
とふと思ひたり

稗草にをりふし紅くそよめくは水引草か交り
たるらし

ひとつひとつ目につく庭の草の穂の絮毛は白
しそよがぬぞなき

松風

山松の音のとわたる日の暮は夕焼の紅き空も
すべぞなき

山松の姿さびしき日の暮は障子早く閉めてひ
とり飯食ふ

晴田の晩秋

ひたむきに雀羽ばたく向ひ風いまや田圃は晩
稲のみのり

むきむきに飛べばつれなし二羽三羽雀垂穂の
野にひるがへる

華かにさびしき秋や千町田の穂波が末をむら
雀立つ

庭前の晩秋

落葉多しすこし掃かめと掃さるたり夕さり寒
き日射に向ひて

秋ふかむ夕日明りや枯山竹に雀羽ばたくこの
閑けさを

水邊の晩秋

ぼつぼつと雀飛び出る薄の穂日暮まぢかに眺
めてゐれば

時 雨

松風のしぐるる寺の前通とほる人はあれど日
の暮の影

目に見えて冬の陽遠くなりけりさのふもけ
ふも薄くみぞれして

いよよ寒く時雨れ来る田の片明り後なる雁が
まだわたる見ゆ

田末わたる時雨の雨は幽かながら初夜過ぎて
出づる月のさやけさ

田家の冬枯

枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐてひようひようど
遠し日の暮の風

かさこそと稻掛の裾搔く稻雀陽のまだ残る穂
をくぐりつつ

ひとつひとつ雀出て来る掛稻の外そとのこり陽遠
し早や時雨れつつ

野良の晩冬

曳かれ来てうしろ振り向く雄の牛の一眼光る
穂薄の風

蒲の穂

蒲の穂のさむざむ明る深の曲まが驚多おどろくろれど聲
ひとつせぬ

ほとほとに西日けうとくなりにけり雲がちな
る蒲の穂の立た

蒲の穂にひとひら白き冬の蝶ふと舞ひあがる
夕空の晴はれ

雀の宿雑詠一

わが宿は雀のたむろ冬來れば日にけに寒し雀
のみ群れて

溜池に枯れし柳もしだれけりみ冬は小ちさき不ふ
二ヒのよく見ゆ

一色に枯れてわびしき庭ながら夕かげのほど
は深くかがよふ

今さらに寂しと云ふもあはれなり荒れはてし
庭をひとり眺むる

ただ一つ庭には白しすべすと嘗なめつくしけ
る犬の飯めし皿ざら

池のべに枯れて聲せぬ河楊かはなやちらとうごかす雀
が白く

夜のひかりはやこごるらしほそり木の枯木の
枝の交まじらふ見れば

咳すれば寂しからしか軒端より雀さかさにさ
しのぞきををる

しきりなく寒けくあらし日向邊をすがふ雀の
羽の音きけば

ほとほとに障子ゆるがす羽音風雀なりけりか
たぶき聽けば

寂しさに堪へてあらめと云ひにけり堪へてあ
りけりこれのみ冬は

今さらに云ふことはなし妻とゐて夕さりくれ
ば燈をとぼすまで

寒

下肥の舟曳くならし夜の明けて野川の氷こゑ
たつるなり

さむざむし背戸の水田のうす氷^{あかぬ}さしつつ夕
焼早し

春立つ

巢をつくる二羽の雀がうしろ羽根かすかにそ
そぐ春立つらむが

春の耕田

春浅み背戸の水田のさみどりの根芹は馬に食
べられにけり

夕^{ゆふ}雨のしみらにそそぐ茨^{いばら}の垣^{かき}萌えいづるそば
に馬近づきぬ

春といへどまだ寒からし茨^{いばら}の葉に面^{かほ}寄する馬
の太く嚏^{はなをひ}る

雨ほそき破^{やぶ}垣^{かき}ちかくひそひそと田を鋤く人の
馬叱るこゑ

春 雨

霧雨のこまかにかかる猫柳つくづく見れば春
たけにけり

垣越しによきしめりよと云ふ聲のうれしくぞ
きこゆ田を鋤けるらし

夕べの虹

ひむがしに夕虹たちぬさやさやし笠ふり向け
よ早少女がとも

虹の輪の七色ふかき片裾は雨しとどなり早苗
田の上

虹の輪にひとしほ映ゆる早苗田の水田の遠の
燈火の列

卷末に

此の自選歌集『花檉』に採録した短歌は『桐の花』、『雲母集』、『雀の卵』の三歌集より抄出した。而して『雀の卵』以後には及んでゐない。

之等の作品の中には初版本或は初版に即した全集本『歌集第一』に無いものも加はつてゐる。訂正されたものもある。此の類は『桐の花』抄に最も多い。未だ公刊されない『第二桐の花』の稿本から抜いた

ものである。『雲母集』『雀の卵』（「輪廻三鈔」「雀の卵」「葛飾閑吟集」三部集）よりの選抄歌にも幾分の訂正がある。

私は十五歳の交より歌作に従った。『桐の花』に至るまでに既にその歌風に二度の轉換期を持つ。決して『桐の花』が當初を成すものでは無い。然し、茲には抄出を差扣へた。

『雀の卵』以後の分量も二千五百首近くはあらう。然し、何れも次の自選の機會を俟つ事にした。なほ此の『花樫』の初版は昭和三年十月であつた。

昭和五年七月

世田ヶ谷の寓居にて

白 秋

345

昭和二十二年一月二十日印刷
昭和二十二年一月二十五日發行



自選歌集 花柳

定價 貳拾五圓

著者 北原白秋
發行者 山本俊太
印刷者 北川武之輔
發兌 改造社

東京都京橋區京橋一ノ三
東京都京橋區銀座西六ノ二
東京都京橋區京橋一ノ三
振替東京八四〇二番
電話京橋(55)一六二〇番
一六一九番

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社
印刷所 東京都京橋區銀座西六ノ二 株式會社細川活版所

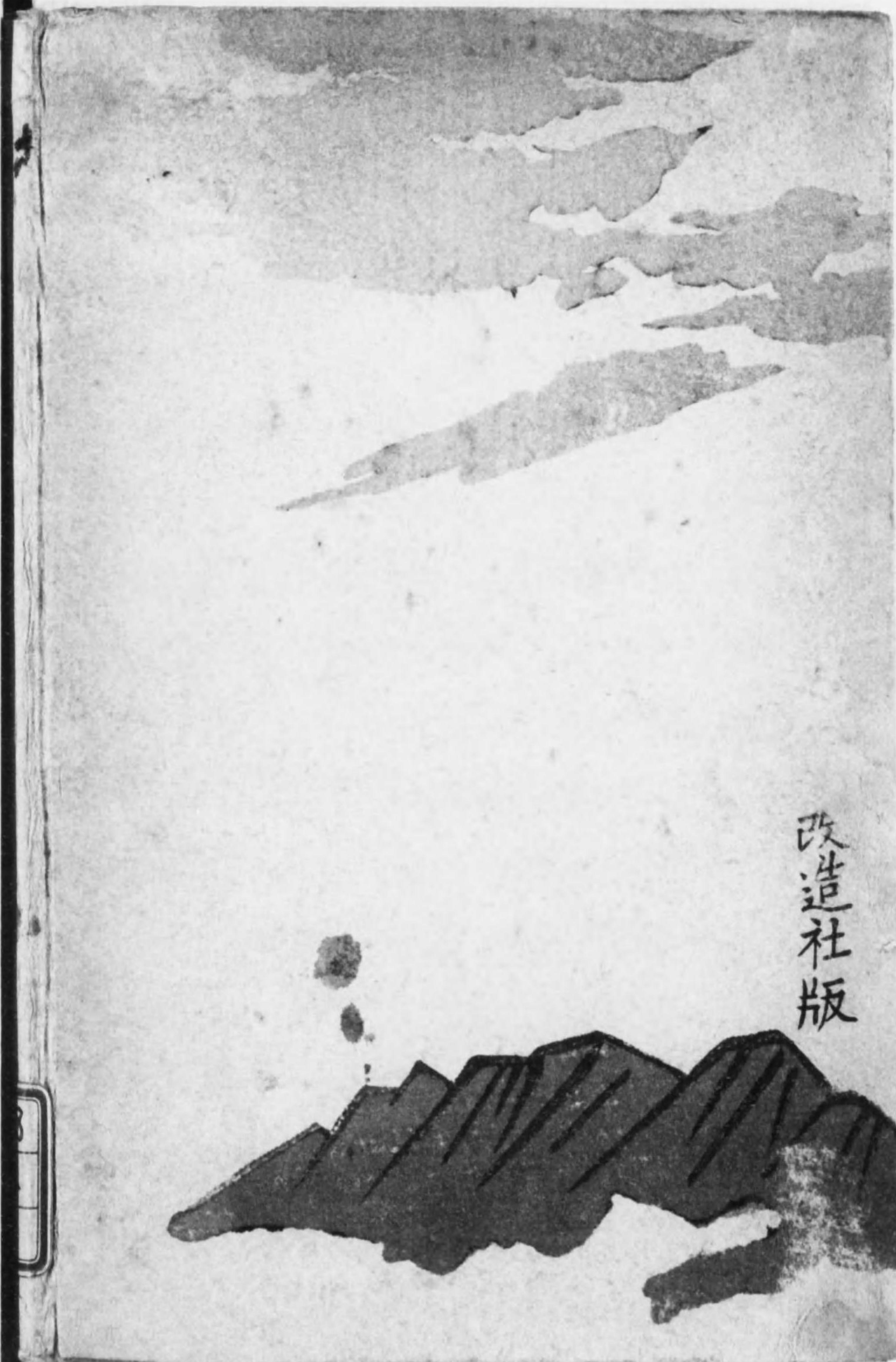
自選歌集

朝	十	槻	野	花	人
の	の	の	原		
螢	年	木	公	櫨	
齋藤茂吉	鳥木赤彦	窪田空穂	若山牧水	北原白秋	與謝野晶子

装幀 石井 鶴三。

定價各冊 貳拾圓
送費各冊 貳圓四拾錢

終



改造社版